

繪本拾遺信長記

一

19  
3564  
1









門 13  
號 3564  
卷 1



夫畫之有功于治教者蓋以  
具草畫之所不逮能於法象  
也然此克其伎者不能為  
今觀桃溪子所繪織田右府  
與程氏相攻戰之技者其在目

早稻田大學圖書館  
昭 34.6.3 入  
藏



其筆致之妙結全觀其卷  
動微之意且均中傳述以國字  
其存以簡而書者而謂正史志  
臣釋友之捷徑矣批溪子嘗  
學書于商月其學有淵源  
矣矣去三月念七日何常中商月

七回這其門生大集于大融寺  
而為畫會富進福之意  
是日一州生袖法卷末乞序  
因書少右余曾擬商月進  
累而臨未見批溪子頗以  
存因也切即之應其需并

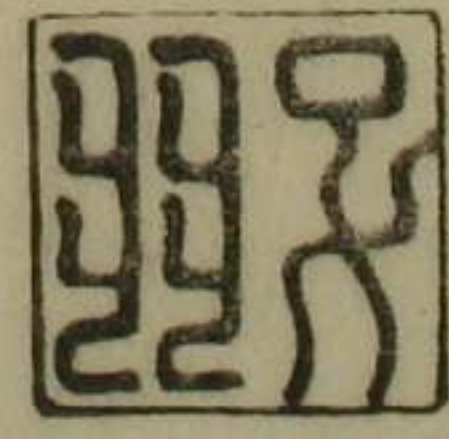


記其夢之新從云  
享和笑矣之暮去

長洲文學梅屋時賜題

并書于此為茶卷清

夢軒



繪本拾遺信長記初篇

惣目録

卷之卷

本願寺傳來八代乃事

山門の衆徒大谷の御坊を美

漢名古即丸湯門蓮如上人と服ひを依

三舟寺園満院近松寺と蓮如上人又附屬と

本願寺高田門徒等強訴

最撥女政親自宮之事

一撥等最撥女が居城を攻る 日景

繪本拾遺信長記初篇



二之卷

攝州石山淨堂草創之事

蓮如上人石山淨堂草創之事

佐々本定於山科淨堂を奏る

下間於上人と大坂(竹ひき)の事

斐田の御書拜徳

願如上人奉願寺相養之事

澄如上人浄即位の料調進

右に兼

願如上人門徒又叙せらるる事

奉願寺朝倉と婚姻

三好松永等弒義輝之事

畠山大館の二童又多名討死

凶徒等争みて室若所奪ふ

小田信長上洛之事

信長乃上洛と恐ましく三好の凶徒に圍(為)る

村母不破の両後奉願寺又復と

三之卷

奉願寺評定之事

金園寺捨松

画本信長記初卷一目



石山より鈴木重幸と石る

本願寺評定

信長攝河内國平均之幸

池田勝政信長と戦ふ

小田勢喜龍寺の城と美

本下及右郎軍用令場本願寺幸

及右郎上人を欺く

本願寺より右軍家へ羽張を欺く

本願寺合戦之幸

三好勢隈の津又勢揃入

秀吉奇計三好を破る

室町所統真砂 二景

己之巻

信長勢州及向之幸

門後の一揆信長の本陣と疾討

信長角力上覧

信長城を攻朝倉幸

信長謙語の落首を立る

信長子信が峯の城を責罵

信長攝州及向之幸



毛野七郎右衛門信長と追討に

三好一黨押田後乃又此と搦ふ

石山本願寺門徒と集休

鈴木重幸入石山本願寺

鈴木重幸没小田勢

重幸奇計信長勢と欺く

百姓等境を築く

重幸小田勢と水攻に

五之卷

川分口樓岸両世合戦之事

柴田勝家勇力

勝家款乃雜兵と拷問に

佐々成政勇戦

攝州石山合戦之事

堀本小太郎討死

信長陣と中務へ移る

小田信長石山本願寺と表り

鈴木孫市勇戦

信長平定へ致すに

森摩惠多款と當る



平野口懐疑之幸

狸村城守討死之幸

信長級軍明智先秀危難と救ふ

平野口乃希ひ

本願寺刈田

六之卷

上人自吊討死者幸

津丹地合戦

上人自討死乃者と吊ひ給ふ

朝倉淡丹坂本出張之幸

日圖

秀吉退陣乃計議をみる

信長之攝州退陣之幸

信長長柄川又船橋を掛る

秀吉船橋と歩崩して三好勢と川中を殺し

佐々牧方合戦ニ系

石山勢級軍之幸

日圖

鈴木重幸荒本村重と戦ふ

秀吉秀吉と舌戦



七之卷

柴田勝家上京之事

柴田勝家信長を誅云々

宇佐山城合戦之事

日圓

小田信治を討死

信長坂本出張之事

一揆等其地親善寺を籠城云々

秀吉計策一揆を破る

其他親善寺落城

諸國一向宗門後一揆蜂起之事

小田信興討死

依勅命小田と朝倉清兵衛和睦之事

勅使江州下向

江州本願寺一揆蜂起之事

二川平左衛門勇力

鎌刃乃城合戦一揆敗軍

八之卷

氏家八道下全討死之事

長治乃一揆信長が歸と退討云々



氏家入石ト全討死

弓削修理女勇力討死

信長燒延曆寺事

日圖

宇治橋合戦之事

信長橋乃瀧の城を焚

刀狩坂合戦山崎長門守討死之事

信長大嶽の城を焚落凡

刀狩坂合戦山崎長門守討死

朝倉義景浅井長政父子生害之事

朝倉義系赤雲寺にて生害

城石強勅攝州本願寺籠城用意之事

本願寺一揆挂田播磨守と殺凡

九之卷

信長再攝州後白之事

信長勅を蒙りて英熟番と切心

鈴木重幸天王寺の陣所と籠城

寺幸奇計小田の軍兵と母びやく凡

光秀の軍美味方乃勢を焚く

下辻村助討死之事



小田勢援並八ヶ村又田と別

下は村の助討死

本願寺領誠希園事

朝倉系種悲しく平泉寺又交る

平泉寺落城

信長御長崎一揆退治之事

松の渡合戦

信長欺て門後の百姓を殺す

十之卷

誠希門後等滅亡之事

小田の家臣官位昇進

小田勢風雨を凌で河津浦(寄る)

高田門後等討下河津後事

河津落城

重幸奇計破矢岩齋事

小田信長加城を責る

誠希の人民山林に隠る

原田信守討死之事

重幸奇謀欺小田勢事

後法橋之命



重幸再計小田勢を破る三系

重幸再小田勢と破る

十一之卷

鈴木孫市郎燒天王寺陣所事

鈴木龜舟好く天王寺の陣兵糧と運ぶ

天王寺合戦

信長即智虎重幸滅丸事

信長級軍

明智細河君所備る

鈴木重幸信長と破る

信長と澤國之事

信長智鉄丸を免る

鈴木豊人出難賀事

小田勢川分口の番船

鈴木豊人難賀を免る

信吉の陣不の冬人を捕ふ

十二之卷

鈴木豊人被擄款事

日圓

異僧孝子を救ふ



豊人有奇懐而到石山寺

日 國

九字名号乃奇瑞

九字名号奇瑞之事

本津乃若合哉

小林園苑小田の戦ひを扶く

鈴木豊人初陣高名之事

園苑勇哉

冬人小林と戦ふ

靈あて佛款を討しむ

十三之卷

自本願寺乞於毛利家兵粮事

九字名号豊人が命よかまうせ給ふ

重幸商人を仕立毛利家に兵粮と借る

松承が番兵商人が荷物を改む

石山密使欺松承番兵事

布高人番兵を討る

堰浦より高松と交は

石山の使者毛利家へ御書を呈は

毛利家入兵粮石山寺



川分口の番 弘室の於君所拓く

重率計策 川分口の番 弘を廢す

川分口 弘軍之率

日圖

總目録終



日本書紀卷一





日本書紀長門力長



中古浪華之圖

日本書紀長門力長





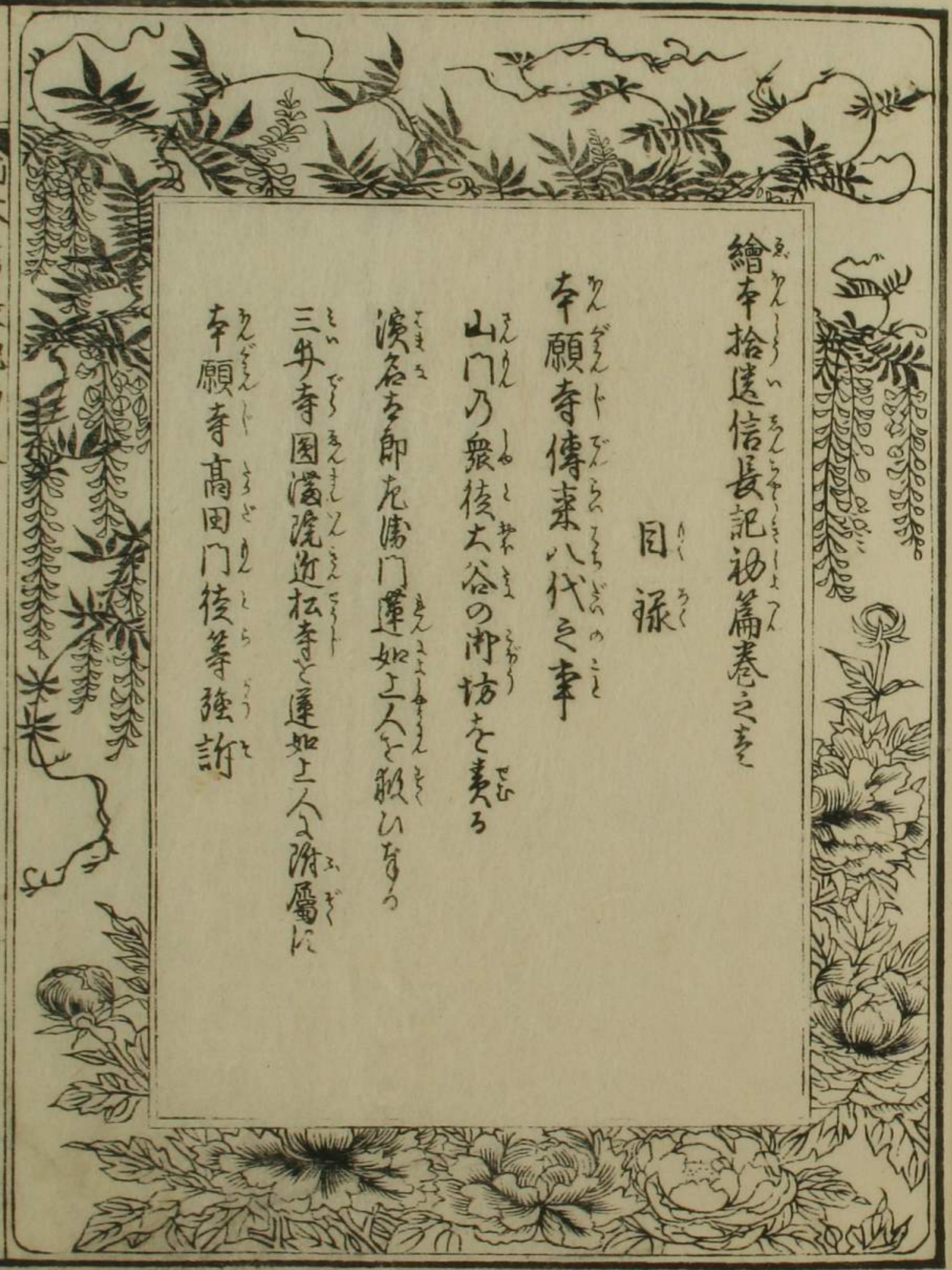


小瀬氏に信長記世小行事既久一編中  
 胸處の老ハ唯石山と校我此一事而已也近頃又  
 信長記拾遺ありて京師雜島秋里に著るる本書に  
 遺漏を補ふるに及り今此著や二書を以てひかるに  
 童蒙の視るべき要と即吾邦此國史と謂ふる  
 可也史に著るべき所ハ古を知らず勸善懲惡今の行を  
 示し小あり抑又繪此要る言の及ばざるを興る者や毎て  
 以て全備せりと謂ふし似て兒童を教ふるにこれを讀み希ハ  
 史を閱此楷梯を以て身以て卷首小附言に  
 浪華六編書子家樂亭中

繪本拾遺信長記初篇卷之五

目録

- 本願寺傳來八代之事
- 山門乃衆徒大谷の村坊を美る
- 漢名を即左衛門蓮如上人を教いなる
- 三舟寺園滿院近松寺と蓮如上人の附屬に
- 本願寺高田門徒等強訴





國權久政親自宮之幸

一揆者國權久政居城を去るに事

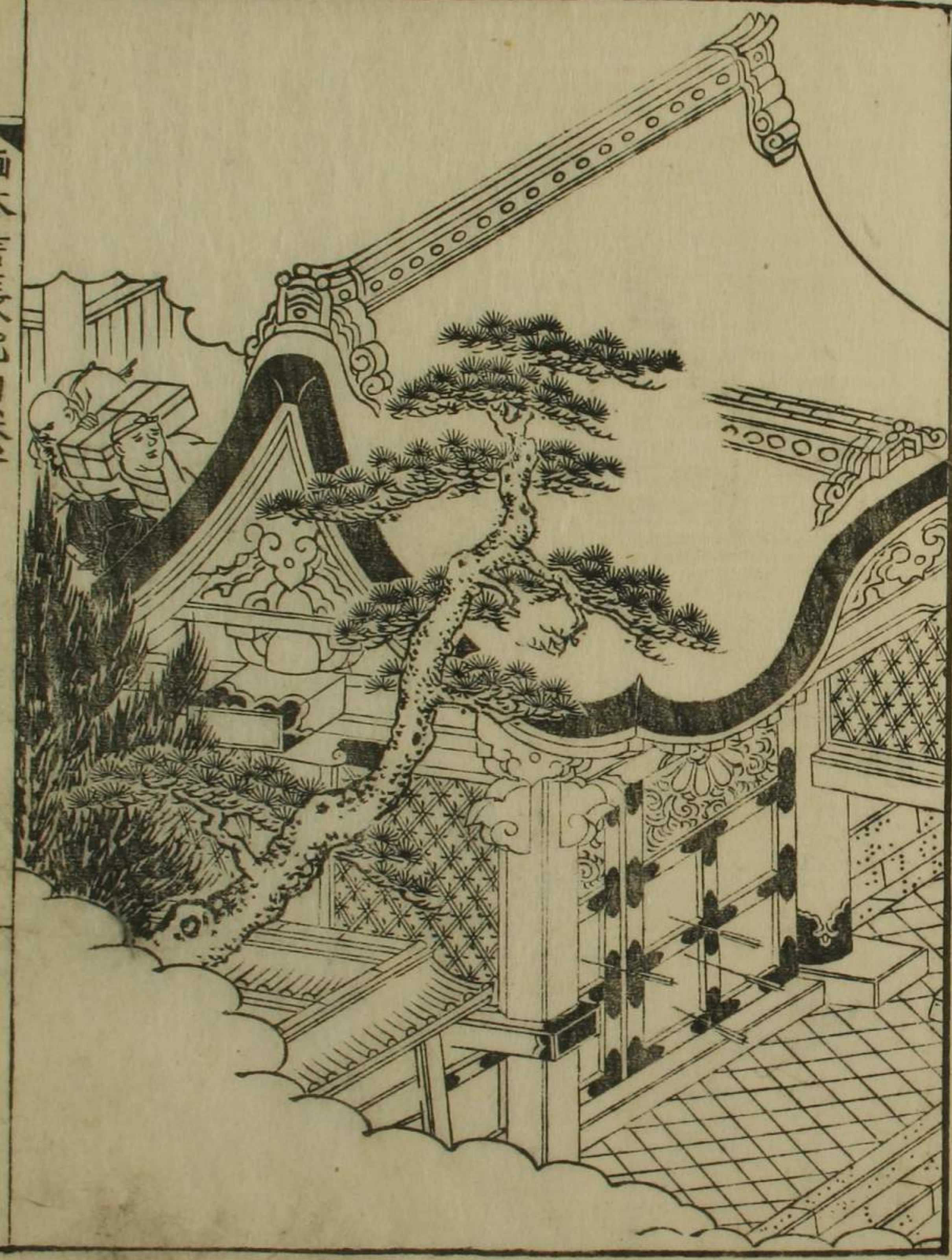


繪本拾遺信長記初篇卷之一

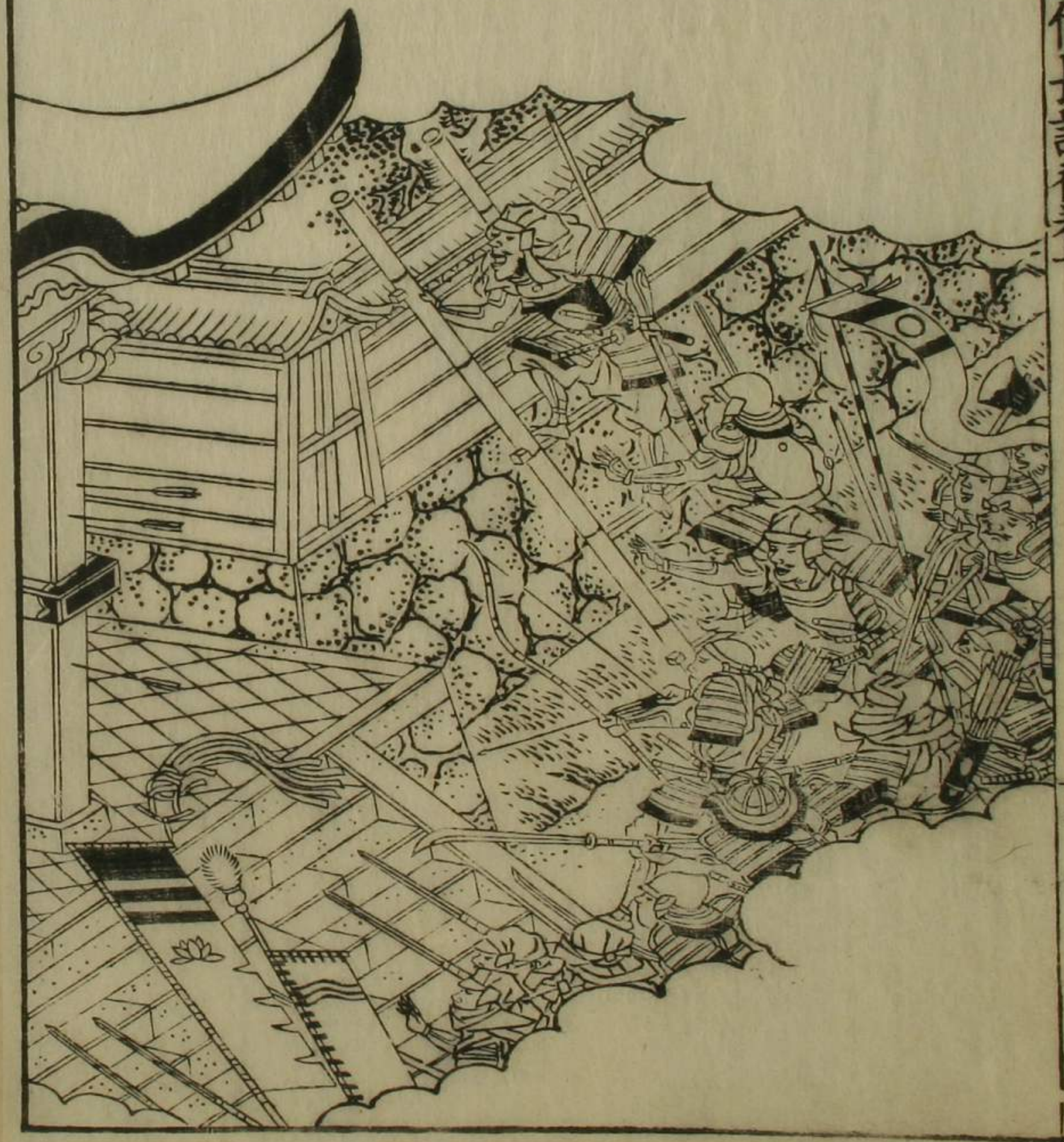
本願寺傳來八代乃幸

本朝人皇百八代正親町院永福天皇の御より小田右大臣平信長と云と中比武治はしくなりたる應仁の比より天下麻の如く私に教十年の向治と治とる凡のる成失より信長云一揆て捕狭間より今川義元と討より武威權勢朝輝の志より向ふ不若て款とる者より初度武田乃強款と云し海舟朝倉三好松永等瓜分と陸天下の諸候悉く懼ひ懼之霸業既に宛らん其家より不恩後ありたる棋州赤松郡石山乃地一白赤本親寺と國執十余年及びびるがとより雄略なる信長云軍乃と換兵年久し一度も令き勝利と云り比終り天正十年六月





えんよと  
山門の衆後  
大谷の所方  
を奏る



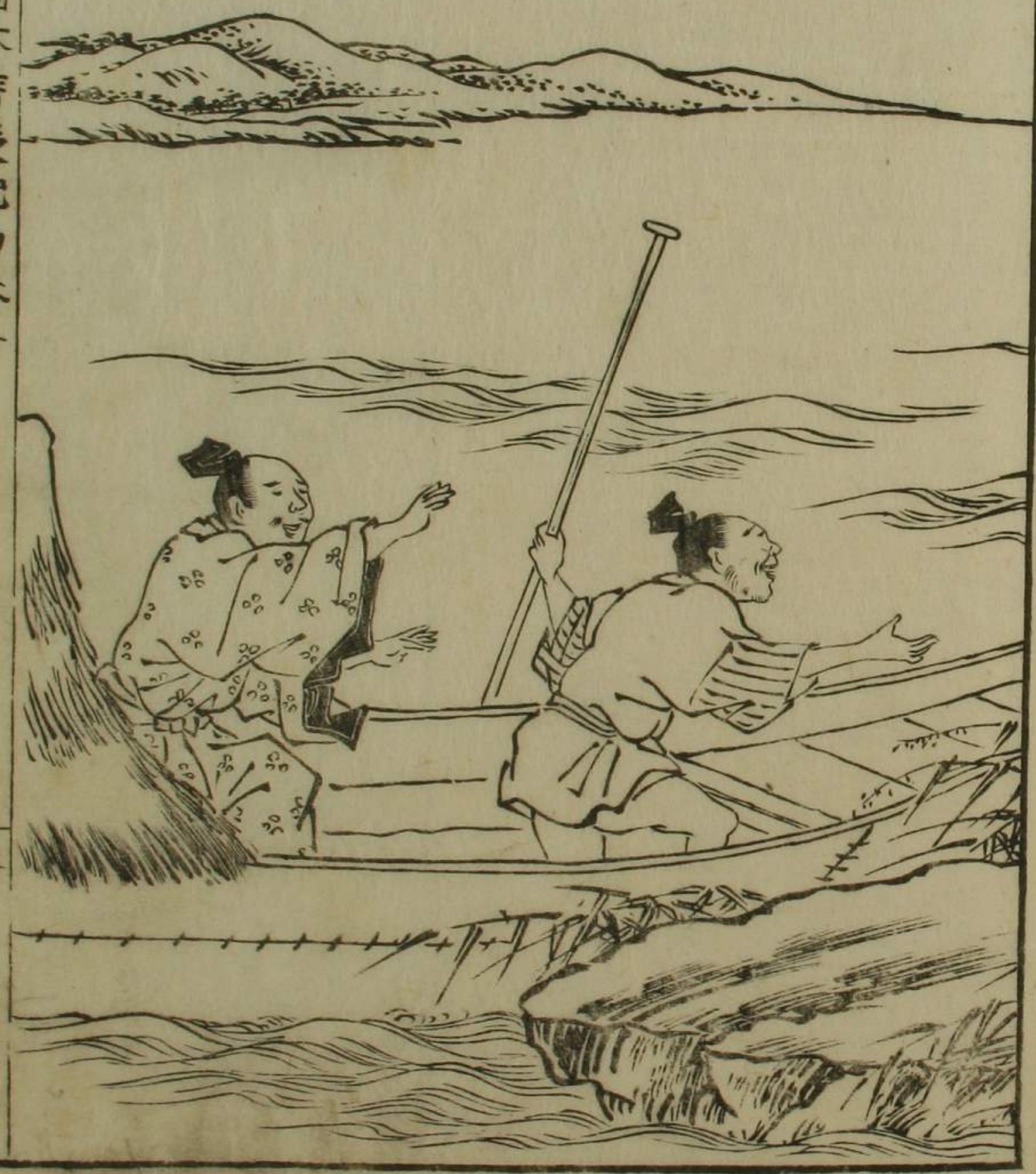


二日家臣明智光秀がぬすむて空しく幽冥の鬼とありて  
ぬるい流に地力を教の念佛未代までと孫業人又昌(衆生と海  
夜は)まゝん如來の御えりりともやと皆人感涙を流しけり  
抑一向宗中教寺の用山親鸞聖人ともや侍り人皇八十四代高倉  
院の御宇兼安三年癸巳乃御誕生して小字と若松丸と申し  
又鶴満丸と申す御父君の天兒屋根の苗裔三室戸の  
大進有軌御母の徳守府の軍左馬次八幡の郎義家御の嫡  
男對馬守義親の女若光女と申す鶴満丸九歳して志蓮院  
自意園和尚の御弟子とありて別發ましく其後叡山の赤塔  
五劫寺の系院と傳せ給ひ天台の要法を學ひ一念三身の奥義  
と究め盡し終に廿九歳にして都六角半觀世音の曼想を感

赤山吉水乃源空聖人の弟子とありて地力専念の善門に入り  
終に赤名山若信房と号し其時又建仁元年月輪の兼實云若  
水の禪房と入りて終に在家修行の先達と云ひ終により若信  
御房三十一歳乃御時則月輪殿の御女玉姫と申し御方と交婚  
あり終に地力中親の若松末代乃九倍と教記し終に三十三歳  
より一城後の國府と遠流せられ終に愛と止り終により多勅免  
ありて常陸國と到り禰田と申すに在りて十年同國下回三  
年相模國府津と曰ふ日國倉田と三年其外遠き國くと經廻  
ありて御身の憂若多難と忘る修念佛と弘めたまふこと  
凡て廿五歳貞永元年六十歳して關東より江州まゝと登り終に  
本部とありて六十年御して六十六歳の御時都と歸洛ましく



淡名右郎  
老湯門  
蓮如上人  
を  
救ひ  
まへ



画本言長肥初卷一



画本言長肥初卷一



龜山院の御治世弘長二年壬戌十一月廿八日御年九十歳と遷  
 化せりくつる是と元祖親鸞上人とるひきする聖人の御女是信  
 尼云御子とる田の頭智房守居の東山大谷の地と求めて地力念  
 佛の石場を建立し終ひてかく宴は信せ終人の信心の門系偈  
 仰せらるり聖人御在せ又又又のつはし御り帝龜山院殊は御  
 信仰まかりくて文永九年本願寺と号と賜り勅額新とあり  
 終ふ弘安三年聖人の三男若齋御房の御子とるて増感とあり  
 ありとる本願寺御二代如信上人とるはの是なり御三代是  
 如上人御に代若如上人御に代綽如上人御に代巧如上人御七  
 代如上人御に代若如上人御に代蓮如上人とるなる則如如上人の嫡男  
 て才徳高く御に御しつる御とる一向宗化力念佛世と一般は御願昌

せり御若御御代二十倍せり今又至て中真用山とるはの  
 日宜方り御乃天子後花園院け上人は歸依し終ひ御中の  
 日華門を大谷の御寺一賜ひつる瓜敷山乃衆徒懸へ憐り奉  
 願寺と破却せんと一山の要係系又百余人寛正六年正月九日  
 警掃し望十日の曉天大谷一押寄間と噂とあげたり御本願  
 寺の御に後けぬつるの御中の僧俗勅天とつる御大方り御  
 防ぎ又又又の御も御我先又遊御も御運如上人も葛布の  
 十徳と御して慶と御門大徳の御一方より終へ山門の要係  
 ありまき又又又の宝物御材を御多し御奉舎又又とけ一庁の  
 煙と燒立勝間ととつく御多し御受惣ありしつる御これ御運  
 如上人の痛くも御せ終へ御房も御御の御田浦或の御日御乃





三尊寺 赤湊院  
 近松寺と  
 蓮如上人  
 又  
 附屬  
 以





迎り又あびく年月を送り移ひるる小文明元年大津の僧人  
源名右即九尾門より若上人を舩又奉せ給うせ密に大津へ  
ゆりておに共て奉送しなるけ右即九尾門方是の男にて三舟  
の儀徳院へ奉り蓮如上人の難儀の次第を物ぐるり御安身乃  
計と釈しるる小元来山門と三舟舟のむらじより其間陸より  
づれば濃徳院又速得心して園濃院大僧正と計三舟舟別不  
の中近松寺と寺領とたよ上人へ進せらるる小上人甚よろこ  
び移ひ近松寺に移りはく本寺は祖師の善教と安座三舟舟後け不  
後せ移ひぬを後文明三年舟子蓮後と近松寺の僧持り如し上人  
大津と立出誠宗園へ下向し移ひ若橋より西に一字の御寺と  
建立ありて安んじ後せ移り又奉たりしが上人の近習下回安

藝達宗より若が仕業よりけ御寺忽又退治せり其始終と  
易り小去る嘉禄二年親信上人下回園大内の底より田と云  
西に一字の御寺と建立ありて舟弟子善佛房と僧持り如  
給ふ是とる田のち修さるる上人遷化の後小園七州けり田  
善佛房の門後多りし蓮如上人若橋よ本寺と建立ありて  
より小園悉く上人乃化寺又帰依し若橋の勢昌日夜の奉信  
引ききり此是より門ぐる回流本親寺流風城別と本親寺流か  
る親信上人の御弟子善佛房の園基せり此の修寺りける田  
も本寺より引り此と誘りる回より本親寺こそ上人滅後竟  
信尼より奉創あり大谷の本親寺りればいうせり是と本寺と  
いんとよに奉い止ざりし後又終り園を安座政親へ傳へ是







洲の判形を教ひらる小政親いゝるやる田流は荷擔して  
 本親寺門後を教義と爲しぬ是又依て本親寺の門後等又  
 勝り國中の旧宗と集り會沢又押よせ置樞女と減さんと企て  
 たり其門後の中又年若うも眞実の者ありて急ぎ誠を若勝  
 の御堂より下間安藝入道蓮宗又附て奉の次第と言ふ  
 ありれ上人より御云系をうけらる門後乃勝りと云ふらさう  
 り淨化もお止し國中の若う男女何の教ひらる是又勝らん急い  
 て傳達治りてしと中々も元来下間安藝置樞女と恨らる  
 むんれ心中又是と云ひけ耐と失り置樞女を討じし我自ら  
 加賀國を押しせんと思念と致し上人の御云に如く中々於ま  
 會沢の置樞女國中の御門系と退放し御宗名と永く断絶

せしめん企る友加賀の門後等一黨し置樞女と討えんとは當  
 本寺より大お一人下さるべきお教ひ奉りいと激しやふやそれ  
 上人大きに怒りた後い是一方うぬちるの之細と委しく尋問  
 ばし其後石出し久し物々下間安藝置樞女放其後世門後  
 とも御國の御と中上げ備加賀の門後又遠ひては一足り又  
 く國又歸り近國の門流をわたり合戦の用意とんし當本寺  
 よりも大お一人をいさるべき上人の御云とらひをそれの被門後大  
 きお怒りきこいといよりさる上人の御云ると仰天して國又歸り  
 ぬされ下間安藝置樞女の類勝寺等成かれたらひ自大お知りて  
 加賀國へ後向せんと其用意とらぐ之置樞女ありしけりて後  
 悪き勝る系がらうすいひらるを養りて若勝の御堂へ押よせ達如と



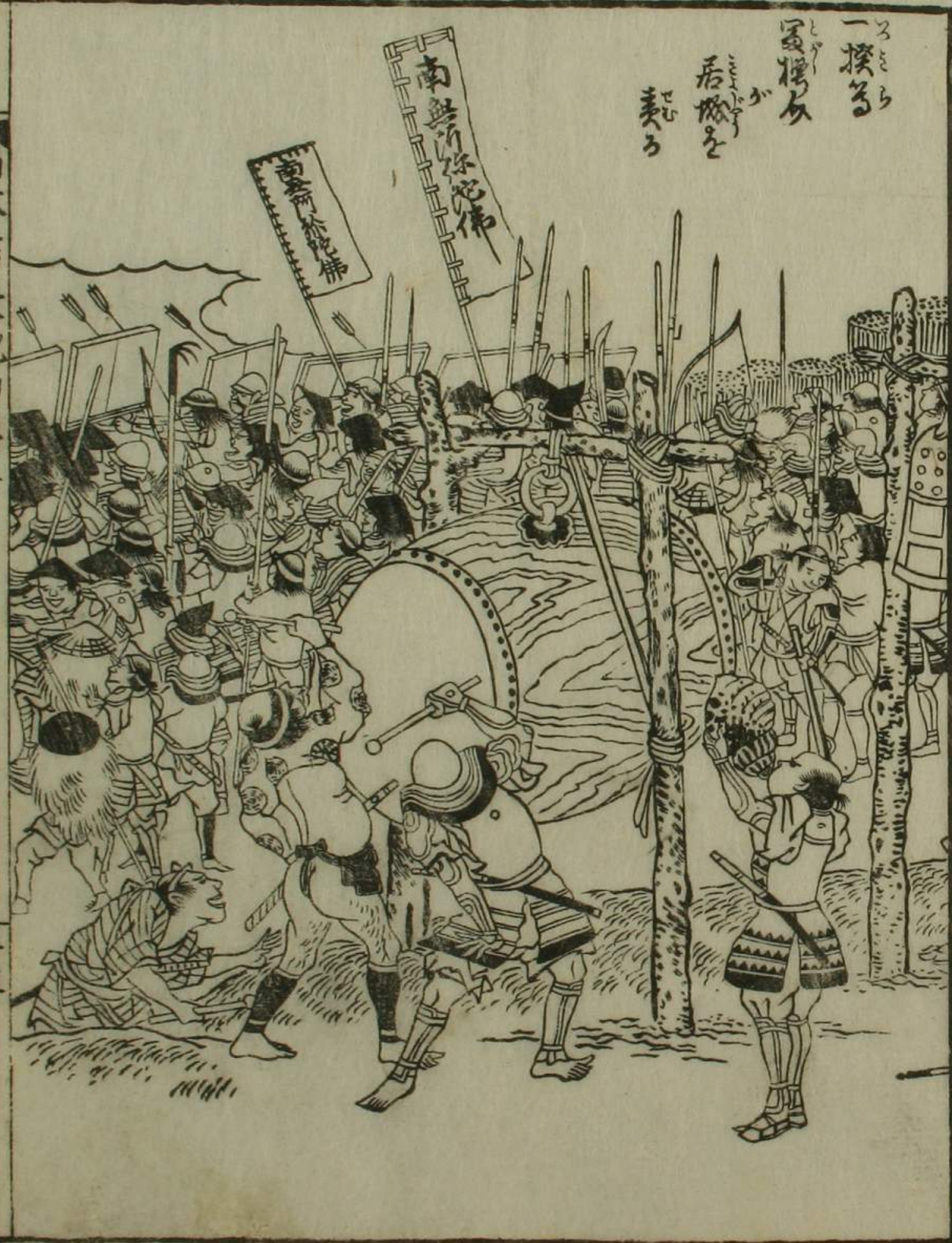
はじめ寺中の奴一人と誅せに討殺せしむる三百余人の獲獲と  
後(誠若)として攻来るを其筋の門後等と見んく大い小か  
ぬし我をたよ吾傍よりあつ子の次第を後進と見んく人再  
驚らせ給ひ扱ひ要き其藝が仕業する我元来其斗しけ  
りを知りて幸脱れ又あつりいんとも詮方はし今いし不  
居る(う)しとて俄に舟よりあつり若狭の小湊へ渡らせ給ふ時  
文明七年八月廿一日の夜なりけし時下向安藝の山に返りぬ  
送らせよあひひ方知りて落したり程なく畠樞政親軍  
勢引給ひ喚き叫んで推参しよと人と始りあつり世寺中乃男  
女とくくを落して人強しえに畠樞政親いよく腹を三火を  
うけし事なりと焼盡し由り後徳の結勝寺へ責よせし火と殺

らて焼立勝岡とつけて金沢へゆりたり是より加賀旅登城せし  
あつりどの中親寺末寺道徳の門後等と殺し忽一揆と  
て金沢へ押よせ畠樞政親と合戦殺多し及ぶも或は討ら或は  
討ら勝負乃とよし月之りたり

畠樞政親自害之事

安よ原原友吉今枝大膳とよし浪人あり乳世の習いし  
人と殺し火と殺ら悪事とおんり大なりと人ども得るを後  
よ一と育ふるにけし兩人も國くと後廻し斬る強盜して毎月  
を送りたるが加賀國中親寺の門後等畠樞政親と合戦よ及べし  
とばきたるに急ぎ加州よ来り一揆の内よ加り後よけ堂の魁首と  
あり証引より所の下知とぬれよ百姓系の軍とるよは事かま





一揆多  
兵糧以  
看燃を  
表ろ

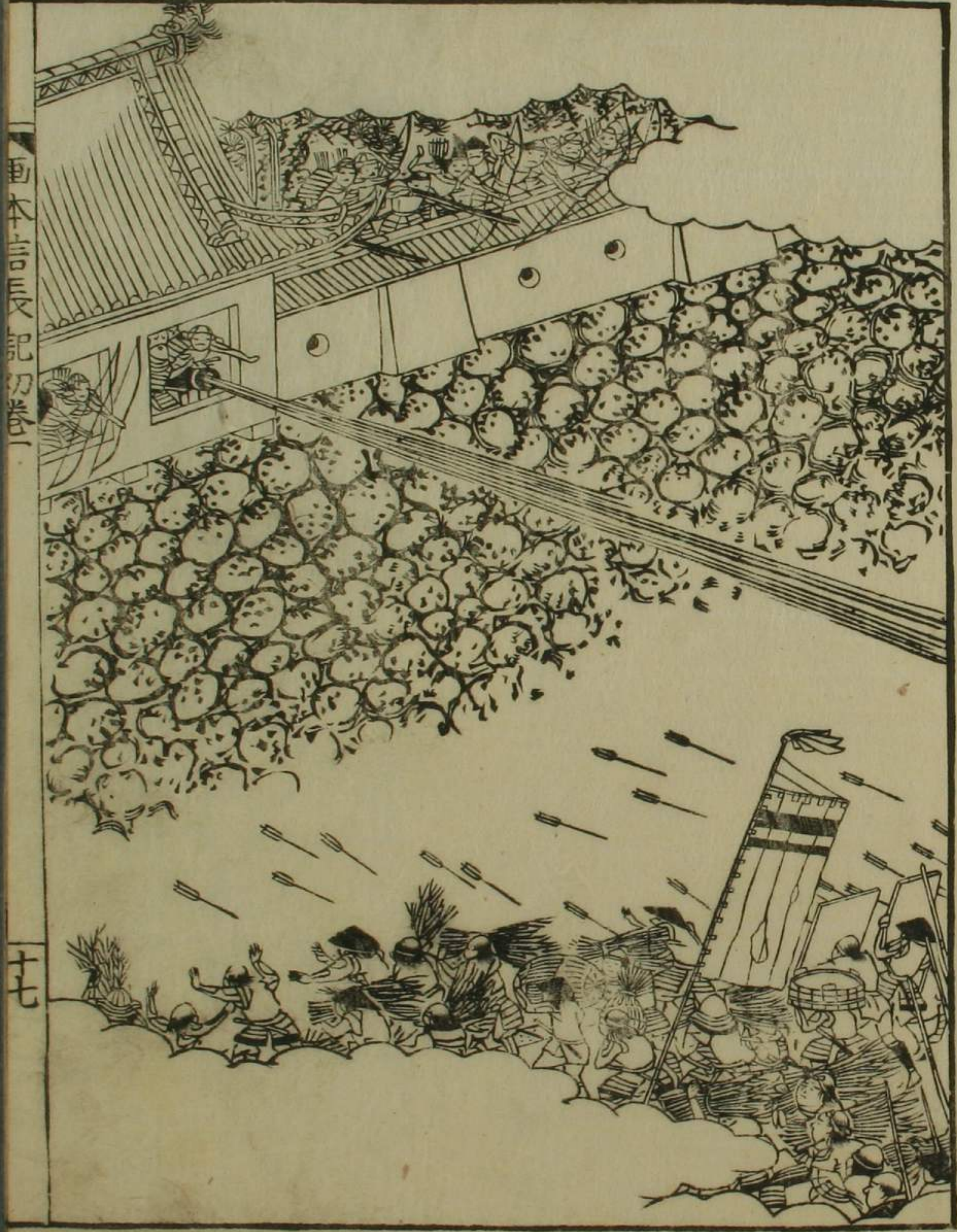




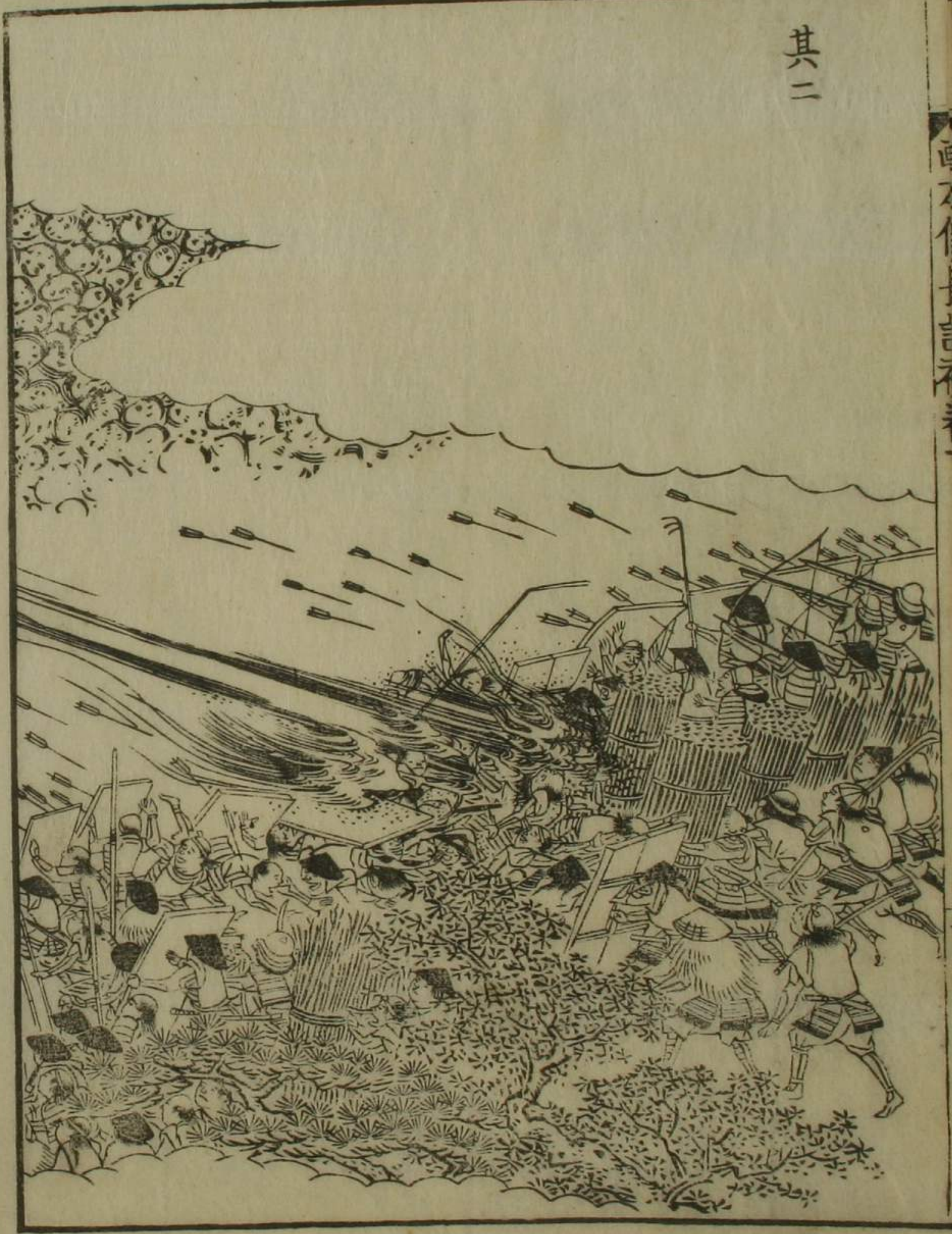
進むよも法あり退くも又則つればけ西人指揮とてそのちま  
 家探女が軍兵故をとりて教度よ及びり附し其の福二重其  
 月原系今枝乃西人少國七州の門後と僅し集り一附し金沢と  
 妻原さんと其勢九万余り南無阿弥陀佛の旗教百流を  
 させ一月二周と仰り雲霞のごく金沢の城よ美よせり家探女  
 少しも發がば一万余人乃燃兵とわめり拵りくと固めさせ敵と矢  
 及び引うけにじつめ引浩さんぐと射りうろふ皆の子のごく集り  
 一寄りの大軍度矣いひし門もつらばこそ亦に進じ一揆二百余  
 人をうろくと射倒され体へ去りけて死する者に大お原原を  
 馬よ法門三軍扇をとて法敵よ向門て死する令い佛恩報謝  
 討死して極樂往生と急げやと大書よ下知する後門後の

一揆多き成座に死んよ願を踏蹴く死と軍ふく美えりり  
 とつとろりは元来一揆の軍師今枝大膳が軍配を六万よ  
 大勢を三よに分け一よの城よ向いて美戦い一よの將軍とめく弱  
 三万よ力と合せよ一よの引退きく体是世しめ附りり又勢と保え  
 美るりの引退きく体是世し軍の城よ多く美戦い体是の兵に  
 軍よ替りかくのどくして豊後を分ち三日三夜息としつ  
 がせば操立るふ大膳が軍配をそ勞る者一人よは城中の  
 是よ引り心の猛くいさめり其身命換えしつごれは岩田着  
 又若し心神疲乏と引ごれ力もく腕痺まきくち力難  
 刀もふれたまき今つらと見んつらり家探女味方乃士  
 率と顧りやつらり我武運もや今日よせまきり汝等皆

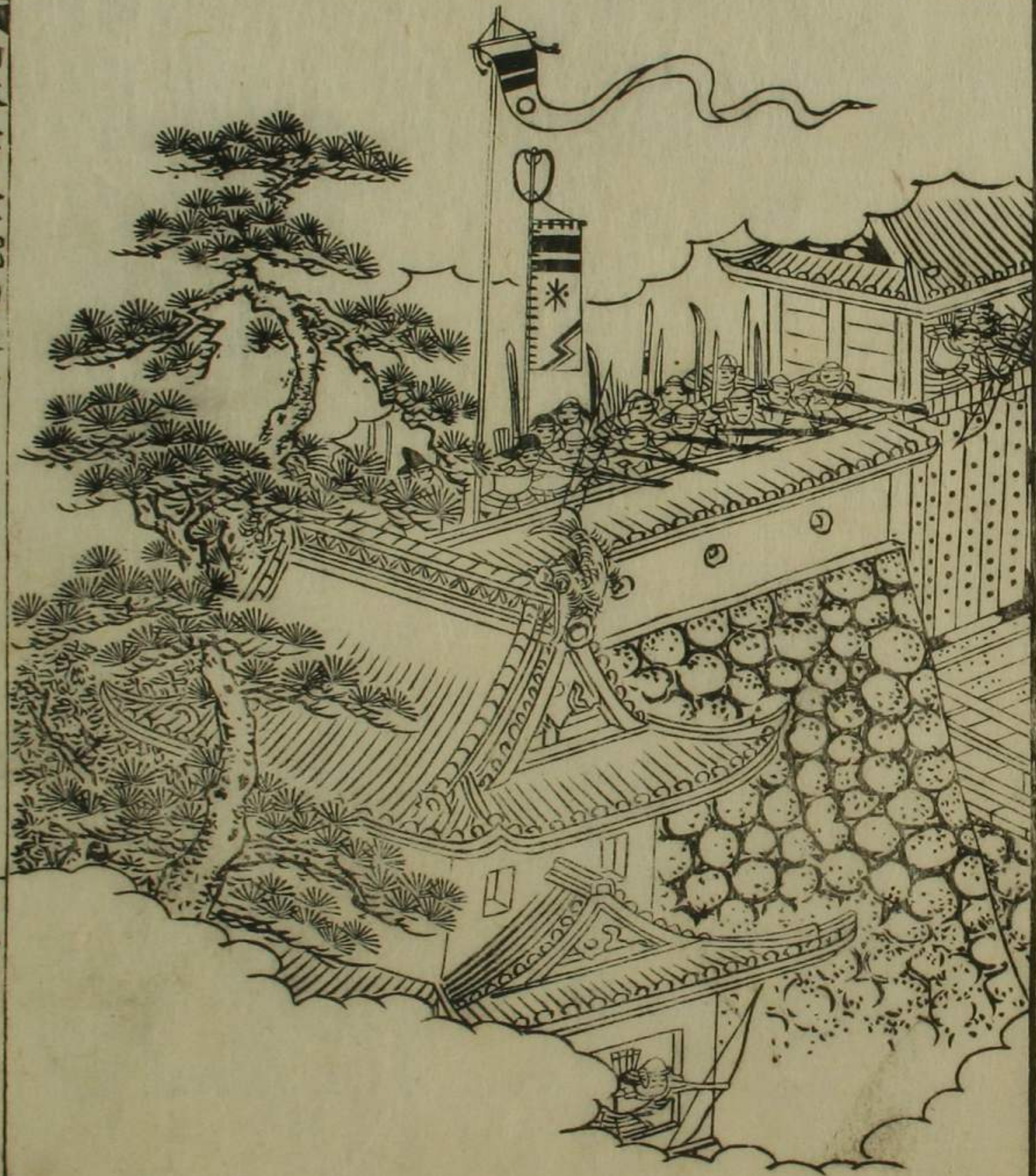




其二







其三





くる際まぐも至後の勝と意に防戦とつこそけこの勢ひ  
るれいで討て出く死く後合戦しとるる腹切をし流しん  
のりよく流し供に死せんととるもの我も流しとせ  
を軍卒一日は涙をなげしうり十代の重君と見捨何國  
妙やせし死出の御伏侍んとく流しん流しん  
ぬたき小敷ひる初酒宴をせしつる形る不々女の軍師  
今枝大膳城中の力敵つるを察しつるみ百人の道跡と  
流しん擲ちの方より押せ埋まると極の内へ投入我きたは飛入  
掃も意ぞととるるや火を放らとく焼とるる軍糧を後  
まどひ返ししつるれが丸乃大門活と開きつるまた一揆  
の中へみ先と掃へ切て入東西は難立南少に斬崩し二三度

又度播合しが味方の兵士大に討て今いそぎとぞと本丸へ押入  
内より火と放ら終り切後して死つるつるに勝なりし次方より  
源の右大臣頼朝より加藤三州と家持は賜ひ頼代守渡御お後  
して武勇の誉とるうりしと宿世の因縁とやみらん去成のお小  
滅亡し其家永く断絶せり本頼寺門後の勢ひかくはる國  
と又攻屠はしめて現や郡代屋をんどの物の教もせは  
たがふ者の幕下と如し敵討者の妻よせて踏崩し心のまは國郡  
を掃めたるやにえより一揆なるのりかれ其の村に我も  
けの一郡に某が死かたりとまは浄論と及びつるを後日士  
軍は月と書しぬを中より多老て長人しき者何門より  
かくての國中も掃へる早免の宗右乃るは代えたる國郡



カレハ本願寺へ領地と拵げ地既般人を予受其下知又跡は臣  
と申よぞ門後多一統又むと何し是より本願寺の支配不  
加賀能登の二國都て本願寺又領せり

繪本拾遺信長記初篇卷之一終



